第 78 回公開シンポジウム

子どもの心と自然

◆ プレゼンター

山中 康 裕

京都大学名誉教授・京都ヘルメス研究所所長・浜松大学大学院教授
/ 心理臨床学・精神医学・総合河川学

◆ パネリスト

香 川 豊

甲南女子大学総合子ども学科教授 / 哲学・人間形成論

◆ 司 会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

一色：第 78 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもの心と自然」というテーマでお二人の先生からいろいろなお話を伺いたいと思います。今日は基調講演のプレゼンターとして、山中康裕先生をお迎えしております。山中先生は、子どもたちの心が変わってきた。それは、自然に接することがなくなった分、特に感じられるとおっしゃっています。ご本人は、カワ(川)ンセラー。カウンセラーではなくて、カワ(川)ンセラーになって、あちこちの川を見て周った。危険と称して、川には子どもたちが殆ど接しなくなり、今度の東日本大震災では自然の側からの猛反撃があった。自然はただ優しいのではない。時には厳しすぎる姿も見せる。それが自然の真の姿なのだ、と語ってらっしゃいます。今日は「子どもの心と自然」をテーマに考えていきたいと思っています。

簡単に先生のご略歴を申し上げます。山中先生は、名古屋市立大学医学部をご卒業の後、同大学大学院終了時点で医学博士を取得され、そして、名古屋の南山大学を経て、京都大学で教授をされ、今は京都大学の名誉教授、そして京都ヘルメス研究所所長、浜松大学大学院教授をされています。ご専門は心理臨床学、精神医学、総合河川学の領域でいらっしゃいます。それからその基調講演に対して、別の視点から総合子ども学科の香川先生にお話していただきます。香川先生は、哲学および人間形成論をご専門にされています。では、山中先生、基調講演をお願いいたします。

カワンセラー活動と東日本大震災支援から、子どもの変化を考える

山中：皆さん、こんにちは。今、一色先生から過分のご紹介をしていただきましたが、実際面白い話になると思いますので、よく聞いてください。いただいた課題から私が考えたのは、「カワンセラー活動と東日本大震災支援から」というタイトルを考えました。これは、今日この講演のために作ったパワーポイントです。ですが、私はコンピュータが得意ではありません。ですので、私と一緒に住んでいる約一名の人が作ってくれました。ほら、美しく、立派なスライドでしょう。

さて、本論に入ります。最近「心の危機」を強く感じる、最近の子どもは変わった、とよく言われます。

そのキャッチフレーズが「キレル」や「KY」ですね。まず、「キレル」は、何と何が切れたのか、端的に言えば、自然と人間とが切れた、と考えています。さて、会場の皆さんで、この「KY」を知らない人は拳手してください。嬉しい。全員ご存知ですね。そう、「空気が読めない」と読みます。空気が読めない子どもたち。これは、子どもだけに限りません。大人にもたくさんいます。それから、「草食系男子、腐女子」これは、「BL」が好きな女の子たちです。「BL」というのは、少年愛、要するに異性間のセックスではなくて、同性愛の男の子たちのセックスを描いた本を喜ぶ女の子たちのことです。「自己愛症候群」これは、精神医学の専門的な用語なのですが、読んだだけで分かりますね。欧米では学問用語はラテン語やギリシャ語を用いる（たとえば統合失調症は Schizophrenia で、ギリシャ語起源のラテン語です）ので一般の人には分かりませんが、日本語は専門語でもすぐ分かりますね。そして「犯罪の質」これが変わりました。

これらのキーワードを軸に「子どものこころの危機」はどこから来たのか、ということを考えていくわけですが、まず、1つ目として「大幅な環境変化」があります。まず、地球環境が変わりました。クルマ中心の社会になり、自然環境はどんどん壊されています。しかも、住環境だけではなくて、便利化、合理化のお題目のもとに、どんどん変わって、皆は「よくなった、便利になった」と言います。ですが、私が、そちらよりも「情報革命」の方が更に問題であると考えています。皆さん方、ここにいらっしゃる方は、数名を除いては、皆、若い女性ばかりです。女子大ですから当然ですね。あなたたちは、生まれた時には、もうテレビがあった。だからテレビは昔からあると思っていたと思います。実はテレビ放送が始まったのは、1953年ですから、まだ60年しか経っていません。では、その前のラジオ JOAK、(NHK) 東京放送の試験放送が始まったのが、1925年、大正14年、本放送が始まったのが1926年、昭和元年です。こちらも90年経っていない、まだ85年。ラジオですら85年なのです。そのようなことを考えたことがありますか。それまでは、映画館に行ってニュースを観る。一週間に1回、ニュースを観に行っていた。そのような時代から、まだ90年しか経っていないのです。更に1983年に「パソコン」の普及が始まった。これは、パーソナルコンピュータ、これを略してパソコンです。これ一見英語に見えますが、和製英語、日本語なのですよ。「チョベリバ」が「超ベリーバッド」の略でやはり新人類たちの日本語ですね。それと同じです。さて、95年には携帯電話が普及し始めました。97年には、使用台数は日本の人口を超えました。今に至っては、すごいです。ipodなどは何でもできます。世界同時に通じますし、音楽でもたくさん入りますし、恋人とは秘密のやりとりもできます。そのように、まさにパーソナル、個人的になりました。でも私は53年のテレビ放送開始から20年ぐらいの間のテレビは「団欒の素」だったと思います。それ以前の団欒の素は「囲炉裏」だったのです。今では囲炉裏のある家は、白川郷やすごい田舎の民家位で殆ど稀有となりました。囲炉裏というのは、家の真ん中に暖炉を作って、その囲りに集い、そこで暖をとるために、家族皆がそこでいろいろ話をしたものです。それが、ラジオができて、ラジオにかじりついた。私が一番覚えているラジオ番組は、「日本の皆様、こちら、ヘルシンキであります」これはオリンピックです。ところが時々、聞こえなくなります。「古橋、橋爪がんばれ」のあの時代です。私は電波がまさに波であると思ったのは、時々聞こえなくなることからです。サインカーヴのようなんですね。sin や cos の。無論これは冗談です。そういう時代に私は育ちましたが、現代は、

考えられないくらい発展をしました。しかし、それが、「とんでもなく人間の心を変化させた」のです。

「こころのよりどころ」が無くなった

「こころのよりどころ」が無くなったというのが、私のコンセプト（基本概念）の2つ目です。以前は人生の目標とすべきもの、或いは尊敬に値する理想像が必ずありました。ただし、これは多分に教育臭がする。しかも軍部や当時の文部省の意向が入っているのも、実は少し臭いのですが、例えば、二宮尊徳の像が必ず小学校の校庭にあって、校長先生の訓話される指令台のすぐ隣にこの像が置いてあった。二宮尊徳というのは、本名は金次郎です。背中に薪を背負って、一心不乱に本を読んで歩いている姿です。要するに勤勉に励め、いつも働け、という教えであったらうと思います。ところが私は、さぼりの人間で、幾人かの先生に嫌われた人間ですから、学校ではよく廊下に立たされていました。それはわざとしていました。なぜかという、先生が話される話は、すべて教科書に書いてあることで、私は教科書を手にしたときに、貰った最初に全部を見て、もうすべて読んでもう分かっているわけですから、何も学ぶものがない。外には先生の話よりもはるかに面白いことがたくさんあるのです。ある時、先生が黒板に書かれた漢字に「先生、書き順が違います」と言いました。すると「誰が決めたの?」と怒られて、教室に立たされるのも邪魔で、廊下に立たされるのです。すると私は望んだとおり瞑想に耽ることができる。そして、先生が横向かれた時にさっと教室の窓から抜け出て、田んぼや畑に行き、そこでイナゴを取ったりして遊んでいましたから、今日のようなお話ができます。話が少しずれました。

昔は偉い人がたくさんいました。今テレビで「お江」（上野樹里主演）のドラマをやっていますが、あれはニセモノです。お江の言っていることの一部は面白いし痛快でいいのですが、史実に全く基づいていません。何が基づいていないか。まず、しゃべり方です。言葉づかいが全く違います。江戸時代の喋り方ではあのように率直には言いません。それに、男の前で座りもせずにつつと歩いて行って、秀吉や秀忠を平手で叩いたりするなどは絶対に在りえない。それだけで即座にお手打ちです。このドラマの脚本の田淵久美子さんが女性で、これまでの男性中心社会からの歴史解釈が非常に偏っていることばかりを教えてきたから、女性の側から言いたいことを言ってやるのだという感じで「お江」を、女性の側から見た戦国史として描いたんで、あのような話になっているのです。でも、この話は括弧に閉じます。そうでないと何の話か分からなくなりますから。ちなみに以前私の孫が通っている小学校に講演を頼まれて行ったのですが、当時小学6年生の孫に後で感想を聞いたら、「面白かった。だけど括弧の中だけをもっと聞きたかった」と言いました。細かいことをよく聞いているな、ということです。さて、本論に戻ります。今は本当に立派な政治家や傑出した人格が少なくなりました。去年は「龍馬伝」（福山雅治主演）をやっていました。あの坂本龍馬を観ていた人はいますか。何人かおられますね。あれを観ていると分かるように、彼は、100年後の日本のことを考えていました。当時、既に国際法がどのように結ばれているのか。特に交易法とか、国と国とを結ぶ法律がどういうことに基づいているのかを龍馬は知っていたのです。龍馬が亡くなったのは31歳です。皆さん知っていましたか。龍馬の先生筋の、というのは高杉晋作の先生だからですが、萩に松村塾を開いた吉田松陰などは何と29歳で安政の大獄で獄死しています。そういう時代だったのです。或いは、先ほど冗談を言いましたが、皆さん

は滝廉太郎を知っていますね。有名な「荒城の月」を作ったのは、22歳です。ところが彼は23歳の若さで亡くなっています。彼は「荒城の月」と「花」他にも沢山の曲を作って、今でも世界中で演奏される日本の歌というと、滝廉太郎の歌が多いです。そのように凄い人たちは、大抵50年後、100年後のことを考えていました。龍馬もその一人です。ところが今は、この6年間で6人も首相が変わって、誰も信用出来ない、今度の野田首相ぐらいは、首相になったいきさつが千葉・津田沼駅頭での20年の街頭演説でしたから、少しは認めてもいいかなと思っていたのですが、どうもいけないですね。でもこれも括弧に閉じます。このように話をしだすと大変なのです。

「宗教や教育への期待や関心」も希薄

さて、「宗教や教育への期待や関心」も非常に希薄です。そして根本的なポリシー（基本的方針）フィロソフィー（哲学、考えの基礎）が無くなりました。後程私にコメントをしていただく香川豊先生は、ドイツ観念論の総帥カントを専門にされている哲学者ですから楽しみです。ここでは一般論ですが、今は本当に何をやるにせよ哲学がありません、政治哲学どころじゃありません。経済にせよ文化にせよ教育にせよ哲学がありません。それに第一、まず言いたいことは、親自身がいきいきしていない。このような言い方をすると秋刀魚やマグロが気を悪くしますが、秋刀魚やマグロが腐ったような目をしている。よくないです。

「自然との接触」の喪失

そして3つ目として、「自然との接触」の喪失。自然と接することが殆ど自然になくなりました。子どもたちが自然と接触することが、とみに減りました。自然環境も変わりましたが、それとの現実的接触が全くありません。スライドに「見る自然」と「触れる自然」と書きましたが、これらは全然違います。皆さんは今も山や林などの自然と接触していると思うかもしれませんが、皆さんは見てだけです。ひどいのは、窓や画面やカメラを通してという見方です。本当の自然に触れていない。この大学の、神戸市の東灘区ですから、例えば、私が神戸の事件で思い出すことといえば、「都賀川事件」です。神戸市で六甲山を源流として瀬戸内海に流れている川が11本ありますね。その4本目の川が都賀川です。その川で事件があった。上流で1時間に30ミリを越す雨が2時間半降りました。その時に神戸の都賀川で遊んでいた7人の子どもと大人が流されて、5人が死亡しました。この川は普通の意味では危険な悪い川ではありません。むしろ神戸市は親水公園として作りましたので、あの川で魚たちが泳いでいるところやいろいろなことを体験させようという発想で作られました。その発想は間違っています。ところが、まず、作り方が間違っています。全部コンクリートで護岸工事や川底を塞いでいる。私はきちんと調査をしているので、わかるのですが、全て塞ぐ形の護岸をしてはいけないのです。ただし、護岸をしないともしいけないのです。今回のような洪水が起こるとすぐに周辺が流れてしまいます。実は工事の仕方があるのです。格子状にコンクリートを十字交差させて、鉄筋を入れるのです。すると間に土が入られる隙間があくので、そこに草を植えます。と言うより、しばらく放っておくと自然に生えてきます。そうすると親水公園は最高のものとなります。なぜ今、こういう事件が起こるかという、

はっきりカウンセラーの立場から言うと、川に保水能力がなくなった。要するに流すだけ、水路だけになってしまった。だから六甲山に降った雨はすべて洪水状に流れてしまう。周辺の土地に水をキープすることをしないのです。だから問題が起こっているのです。舗装をすればいいということではないのです。私に言わせると、道路も舗装しすぎです。だから水をキープできないから、降ったら大洪水、とうとう和歌山県の山奥にまで洪水が起きました。普通だったら津波など、山に起こるわけがない。熊野の住人の老人の方が「こんなのは生まれて初めてです」と言っていました、当然です。けれども、あの時は降り方が違う。あの辺りは、年間に2200ミリも降る多雨地帯なのですが、その内の1800ミリが3日間で降ったのです。これだけ降ってしまうと、水が多すぎるということで洪水が起きました。

「身体（からだ）との関係性」も変わった

4目としまして「身体（からだ）との関係性」も変わった。皆さん、透明人間になりたいと思ったことありますか。私はあります。ドラえもんなら「どこでもドア」が欲しいです。そうすれば、しずかちゃんのお風呂にすらさっと行けます。でもそれはできません。そのようなことをすると、警察に捕まり、ここに講演会に呼ばれることもありません。なぜ、そのようなことを言うか、身体があるからそのようなことはできないのです。その代わり、身体があるから助かっている部分もたくさんあります。身体があるということだけで、思春期の子どもたちは、どれだけ一喜一憂しているか、どれだけ困っているか。特に女性には生理がありますから、なぜこのようなものが始まらなければならないのかと考えていますから、そこだけでも身体との関係は、女性の方が男性よりはあります。つげよしはるの作品に『赤い花』という名作がありますね。始まった生理の意味が分からず、川に、流れ出る血を流す話です。とても悲しい、辛い、つい先ごろまであった本当の話です。

それでも、身体が「生きられる身体」になっていません。「生きられるからだ」という言い方をしたのは、「Leib、ライブ」（ドイツ語）という言い方をしますが、Zutt（ツット）という学者が1958年に言ったことです。今はほとんどが「生きられるからだ」というのを生きていません。身体が対象化されてしまった。「Koelper、ケルパー」というドイツ語があるのですが、これを私は、日本語に訳するときは、「身体」と漢字で表記し、先ほどの「ライブ」の方は「からだ」と訳します。対象化されたところで、自分の身体を見ていたりする。身長が何センチ、体重が何キロ、赤血球が450万個と、すべて数値で表してみている。そのほうが科学的だと言うのです。さて、最近電車の中で、目の前の女性が突然、化粧を始める。あんなに恥ずかしいことは以前には聞いたこともないし、見たこともない。でも、最近は何をしないと彼らはやっていられないのです。なぜか。朝、それだけ30分、朝シャンが出来るからです。当然の合理化で化粧をしている。実は、「からだ」はもう一つの宇宙なのです。microcosmos、マイクロコスモスという言葉を使います。普通、宇宙と呼んでいるのは、macrocosmos、マクロコスモス、これらはラテン語です。マイクロというのは、小さいという意味で、コスモスは宇宙という意味です。マクロは大きい。だから、大宇宙です。

「人生七十古来稀なり」

私は昔がよかったとは全く思っていません。今の方が遥かにいいです。けれども、問題もたくさんあります。まず、私が小さかった頃の話をして。実は私は、ついこの間、誕生日を迎えて古希になりました。古希というのは、本当は古稀と書きます。杜甫の詩「曲江」の中で、「人生七十古来稀なり」と詠っていますから、70歳のことを古稀というのです。昔は70歳まで生きる人はとても珍しかったので、そう言われました。今ではそんなことはありません。100歳を超える人が4万人以上もいます。さて、私が、小さい時は、「三種の神器」というと、電気冷蔵庫、テレビ、電気洗濯機でした。今この3つがない家を探す方が難しいです。昔は近くに駄菓子屋がありました。貸本屋がありました。ところが今は、3Cの時代、最初はcar、クルマです。次にcolorTV、カラーテレビ、そしてcooler、クーラー、これらも今はない家がないでしょう。小売店が消え、あつというまにスーパーが乗り出してきました。私は、関西の人間になって31年目になりますが、その31年間、どれだけ小売店が潰れて、どれだけスーパーが乗り出してきたか。結局、一つのスーパーが出てくると10店舗ぐらい消えていきます。そのスーパーに近い人はいいですが、遠い人は行けません。だからクルマが必要になります。スーパーが出て行くにしたがって、そのような店に行くには、遠いのでクルマが要ります。近くの駄菓子屋や文房具や古本屋でだべったり、楽しんだりというのが全く無くなりました。「だべる」という言葉の意味がわかりますか。無駄なことを喋ることです。無駄の「だ」と喋るの「べ」で「だべる」ということです。そのようなことが減りました。クルマを使うことでどうなるか、勢い閉鎖的になります。自分だけの空間になりますから。一方、クルマの中はどんどん便利で快適になっています。クルマの中でボタンを押せばCDが流れるし、テレビまで見られる。テレビを見ながら運転をするなど、無茶苦茶です。

クルマの増加に伴い、道路が整備されました。私は60年前に手塚治虫の漫画で、50年後60年後には本当にそのようになるのかなと思っていたら、なんと手塚治虫が描いた通りになってしまいました。空中道路、高速道路はその通りになりました。当時それは、遠いアメリカの話なのだと思っていましたが、日本でもそうになりました。阪神淡路大震災の時は、皆あの高速道路が倒れることなどないと思っていたけれど、倒れました。地震がもし、朝の8時台に起こっていたら、死者はあの3倍か5倍の人数になっていたでしょう。

人への関心はどんどん減りました。クルマに代表される機会やモノにのみ関心がいきました。今でも携帯の新しい機種はどうかかなど、やりすぎたので日本の携帯電話は世界で売れなくなりました。機能が難しすぎて、とても外国では使えない。それだけの機能を使いこなすだけの文化が落ちていない。では、どこのが売れているか。韓国や中国に、結局、席卷されてしまって、日本は追い抜かれました。やりすぎても駄目なのです。

環境破壊、これについては、皆さんもよくご存知なことです。私なりに纏めました。道路を作ることが優先されて、ますます需要が上がった電気の供給のためにダムが必要になる。今、八ツ場ダムが問題になっていますが、原子力発電などは本当は必要ないのに、必要になってきたのは、このためです。そしていつの間にかそのような発展が「進歩」として位置づけられ、称揚され、いつの間にか「経済優先主義」が日本、世界をリードするようになりました。これが間違いの元なのです。人のお金で、何も

せずにデスクの上だけで、この株が上がったからその株を買うということをしている人が1日に何百万円も儲けるのは間違っています。これも括弧に閉じます。どんどんと自然が破壊されていきます。ダムが作られるとどうなるか。道路が作られるとどうなるか。説明しなくても分かると思います。私はこの夏、揚子江に行きました。揚子江というのは、世界で最長の川の一つです。世界最長の川というと、ミシシッピ川とアマゾン川とナイル川と揚子江です。そのうちのアマゾン川を除いた3つは既に行きました。

「日本列島改造論」

速いことはいいことだ、大きいことはいいことだ、の掛け声の下『日本列島改造論』がまかり通っていました。この本を読んだことがある人いますか。これは、田中角栄という人が書いた本です。彼は、一介の百姓から小学校しか出ていなくて、身を立て首相になった人です。豊臣秀吉の現代版です。でも、私は田中角栄が大好きです。但し、皆さん方は、あの人のロッキード事件を知っていますか。「コーチャン氏からピーナツを3つ貰った」とかいうお話です。コーチャン氏というのはアメリカの貿易商で、ピーナツというのは、一粒が1億円を意味します。要するに、お金を収賄した人なので、そこだけ見れば悪い人です。けれども、私が彼を好きなのは、率直で実直で行動的で実行力があつた等、いろいろな理由がありますが、私が中国に招かれた時に彼地で講演したのですが、中国は彼がもう裁判で訴追された後にも、「中国との国交を回復した大恩人」として、彼を最恵国待遇、つまり、最高の貴賓として遇しました。周恩来首相らがそうしたのです。周恩来も私の大好きな人で、京都の嵐山に彼の「雨中嵐山」という青年時代の詩の碑があります。でも、それも括弧です。ただ、角栄氏の嫌いな部分もあります。それは、「速いことはいいことだ、大きいことはいいことだ」という彼の哲学です。それによって、便利がいい、合理化がいい、ということでどんどん余分なもの、隙間、空き地、ゆとりの類が削られていった。土地が余っているのでアパートを建てようと、どんどんと空き地が無くなって、子どもが遊ぶ場所がなくなりました。私たちの頃は、空き地まで行かなくても道路自体が遊び場でした。道路で野球をやっていました。馬が糞をして少し臭かったけれども、野球や缶けりや竹馬やいろいろなことができました。個人も、人間関係でも、どんどんゆとりや無駄をなくしていく。ミヒヤエル・エンデの『モモ』（岩波書店）という作品を読んだことがある人はいますか。4人いますね。ミヒヤエル・エンデはドイツの作家で、モモというのは、女の子の名前です。この作品は、実は、香川豊先生もご専門がカント哲学なので、日本で『モモ』が訳された時に一番喜んだのは中村雄二郎さんや木村敏さんをはじめとする哲学者や精神医学者でした。こんなに分かりやすく哲学的な思考を説いているとみな喜んでいました。エンデが亡くなった時、岩波の『図書』という雑誌で、ドイツ文学者の池内紀さん、哲学者の中村雄二郎さんと私との3人で鼎談をしたことがあります。

「関係性」が奪われた

ラジオの時代は、まだ新しい囲炉裏として、新しい楽しみを提供し、生活に潤いを与えました。私の家のラジオは半分壊れていたし、私はまだ4歳寸前でしたので、天皇陛下の終戦の詔勅は、難しい言葉でお話されていたので、よく分かりませんでした。ところが今やパソコンはどんどん個別化させ、ど

ほとんど人々から関係性を奪っていきました。携帯があるからいいと皆さんは思うと思います。携帯はすぐに電話もできるし、メールもできると思っていると思いますが、ボタンを押すとそれで関係性は終わってしまいます。関係性というのは、すぐに切れてしまうことを言わない。この関係性をどんどん奪ったのが機械です。携帯の発展は一見いかにも人々の距離を縮めて、人々を固く繋いだかに見えるのですが、その実、スイッチを切れれば、関係はすつと切れてしまう。

昔は良かったとは言いたくない。昔は昔でいろいろな困難や苦勞がありました。でも、誰にも大きくなったら大人になったら、何々になりたいという大きな目標があった。今度始まったテレビの朝のドラマはパリのコシノ姉妹の母、つまり、小篠綾子の話ですね。ドラマでは小原糸子となっています。それはともかく、明治時代の人間はこう言いました「大きくなったら大臣になる」「博士になる」「大将になる」「社長になる」この4つが目標でした。ところが今は、どうでしょう。有名人といっても、薄っぺらで蓮っ葉なへらへらしたタレントばかりが目標になって、みな軽薄化している。人生の大目標が消えた。そこにはみな平等という、いい意味もありますが、悪い意味もあります。

例えば、政治家。天下国家を論じて、50年先、100年先を考える大物は殆どいなくなりました。せいぜい10年先のことで嘘ばかり言っています。こんな政治家たちには任せられません。しかし日本は、政治は誰がやっても同じということも皆知っています。だから、茶番劇として見ているだけです。テレビには軽薄な人間ばかりがはびこって、ちゃらちゃらと動き回って、真剣な議論や討論をする姿勢が本当に少なくなった。

香川先生にお聞きしますが、今、カントを研究しようという学生はいますか。ドゥルーズやデリダならあるかもしれないけど、なかなか、いませんでしょう。カントやヘーゲルやショウペンハウエルやケルケゴールなど、デカンショなどで、名前は聞いたことはある、あるいは本の表紙で字を見たことはある、けれども彼等名だたる哲学者たちが何を考え何を書いた人かは全く知らない時代になってしまいました。全くこれはおかしいです。一方で、これまで尊敬され随分と高みに見られていた職種や企業の人間が、軒並みに悪事を露呈し、大きく、期待を裏切りました。ソフトバンクは可哀想ではあるのです。実は皆やっていたことですが、たまたま槍玉に上げられたのですが、企業をあそこまで進めるとあのようなことになっていくことを示した意味はあるとは思いますが。とにかく、大会社、大企業といわれていたものが、例えば今であれば、東京電力、ここは持っている資産は凄くて、社長たちは、親方日の丸でやっていたのが、今や平身低頭して、保障について話をしている。でもあの保障は、1年2年や5年10年の類の話ではありません。向こう50年は問題です。実は、私は震災後3日目に水素爆発が起こった時点で、東京まで200キロですが、まず東京までは被爆範囲になると思いました。今だにNHKは危険区域50キロの範囲と報道をしていますが、あれは間違いです。その証拠に栃木県、埼玉県、群馬県で採れた野菜や草が、実は、セシウム137を含んでいて、それを食べた牛たちが云々という話が出てきています。そういうことから総合すると、もう200キロ内外は、全部放射能の被爆範囲内とすぐわかる筈です。だから、少なくとも、私は、特に福島の方々が本当に大変であると思うのですが、あの福島近辺の、特に原発近くの方は向こう50年は住めません。これはとんでもないことなのです。

「からだ」が生きられていない!先ほど Zutt というドイツの先生のお話をしましたが、この名は誰もご存じなかったのですが、からだを対象化されてしまったことには気づいておられる方もいらっしゃると思います。対象化というのは、オブジェ化することです。例えば身長であれば 183 センチ、高収入で高学歴となると「カレ」になる 3K の対象です。とにかく 183 センチという数字、体重なら 70 キロはちょっと重すぎる、50 キロでないといけない、イケメンでないといけない、などと言います。何もかも数値や見てくれだけで評価するようになった。人間の本質やその人がどういう人であるかという内面や資質のことは誰も見ない。数字や顔かたちだけを見る。一番ひどいのは、私は医者でもあるので思うのですが、今や医者たちも液晶画面とキーボードとマウスしか見ていない。患者の顔を全く見ていない。そして数字ばかりを見ている。あのようなことであれば、もうすぐコンピュータに数値が計上されるようになるので、データは中に内蔵されて、今の自分の身長と体重と食べているカロリー摂取量などを入力したら、何キロカロリーが余分でございませぬとコンピュータが答えてくれるようになって、そういうことには医者はいらなくなるでしょう。そういう時代が来てもいいと私は思っています。医者にはもっとしなければいけないことがあるからです。要するに何が言いたいかというと、ケルパー(身体)などを見ていてもしようがない、ライブ(からだ)を見なければならぬのです。

根源的な不安、教育への失望

宗教や教育や哲学の問題として考えると、人々は根源的な不安に陥り、旧来の宗教はもとより、新興宗教に期待したが、大部分はそれを大きく裏切った。特に戦前などは、不安が強かった。いろいろな変な宗教がたくさんありました。何人かの有名人までが変な宗教に陥りました。最近でいうと、オウム真理教、今はアレフという名前になりましたが、これなどは、非常に巧妙です。私は、オウム真理教の教義を読みましたが、これならば若い人が惹かれる筈だと思いました。見事に科学的装いをとっています。要するに、アストラル世界とかいって、横文字をカタカナで表記して、アストラル世界では、スピリチュアルな何々が問題になるので云々と書いてある。そして、それを乗り越えるためには、何をどうしていかねばならぬなどと書いてある。オウム真理教を信じていくと、すべてそれらが乗り越えられる。要するに若者が飛びつく科学用語、実は、私は科学というのは、科学という悪い意味での宗教であると思っています。科学というのは、いわゆる悪い意味での宗教にすぎなくて、科学を信じていれずべてがうまくというのは、それは確かに 50 年前、100 年前はそうでした。事実それで現在の社会が作られたのですが、実はそれで幸福になれるわけではない。教育だけが貧乏人のの上がる唯一の道であるということで、教育への過剰期待が白熱したのが 40 年前辺りからです。東大、京大、九大、早稲田や慶応へ行こうというのが、標語のようになって、教育熱が熾烈に上がりました。ところが今の日本の状況を見ると、大学は実に沢山作りしましたので、殆ど全入に等しいので、今そのようなことはありません。大学に行こうという人は全く困らなくなったのです。今一番それに困っている国は、韓国です。韓国の入試競争率は凄くって、ソウル大学を受験しようとしたら、何十倍の難関を突破しなければならぬので、何と占いなどが流行っています。変な事実です。科学万能を夢見て、占いをしてもらっている。そういう転倒した世界なのです。しかし、真の意味での教育や哲学は殆ど軽んじられ、誰も見向

きもしない。技術的なものや表面的なもののみが幅を利かせ、教育の中核が抜け落ちてしまった。大体、教育というのは、どういう言葉か知っていますか。「教」というのは、教えるという字です。この教えるという字の左の部分は、子どもを教える、これは、右手です。右手で鞭をもって教えていたのです。私は、鞭で叩くことがいいとは思いません、片方で鞭を持って叩くぐらいの厳しさを教えるという一方で、「育」これは、子どもが下をむいて生まれてくる姿です。この月は肉月といって、肉なのです。子どもにだんだんと肉をつけていくという意味です。これが第一の意味です。第二にこれは「はぐくむ」と読みます。教育の育だけで、下に「む」という送りがなを置けば、「はぐくむ」と読みます。この「はぐくむ」という思想が教育から抜け落ちてしまった。教え込むだけ、だから聞きたくない話は聞かれませんし、はぐくむこと自体がなくなった。以心伝心で伝わるべきものが、以心伝心という言葉すら知らない。一方、西洋では education、この最初の e は、ラテン語の ex つまり、外へ、ducere は引き出すという意味ですから、その人の持っている「可能性を引き出す」というのが教育の原義なのです。

子どもを塾に行かせて、競争を押し付けて、本当に必要な遊びを奪って、表面的な勉強だけに重きを置いて、子どもはどうなったか。まず、無気力になりました。一方親たちも、自分自身がいきいきとして生きていません。子どもは親を見ていて、ますます目標や人生の意味を失っていきます。私の初期のクライアントで、ある高校2年生の男の子でしたが、学校に行かなくなって半年で、私のところの診察にくるようになりました。「なぜ、君はここにきているの?」と聞きますと、「学校に行っても意味がないから」と言います。そして先生に「何のために学校に行かなければならないのか?」と聞くと「いい学校に行って、いい会社に入って」と言う。そうなるとうちのお父さんが東大出で有名企業に勤めているけれども、絶対お父さんのようにはなりたくない。なぜなら、お父さんは、どこに堇の花が咲いているか、昨日初めてメジロが来たとか、先週雁が帰っていったとか、今サザンカが咲いているとか言うことを全く知らない。だったら学校に行かなくてもいいとなって、「だから行きません」と言いました。

阪神淡路大震災は半ば人災だったのではないか

神戸にはこの千年間地震はない、と豪語していた人が有りましたね。そしたらあの地震がありました。私は、半分は人災だと思っています。一番の大きな理由は、六甲山を削って、ポートアイランドを作ったことによる地表の重心移動に起因する部分があるのではないかとすら思っています。ですがこれは、私の説なので括弧に閉じます。要するに自然には、厳しい側面があるので畏怖が必要なのです。安易な目先だけの利益や表面的な発展だけで考えずに、根本的なアイデアを考えて行くべきなのです。しかも、これまでの産業構造、社会構造、文化構造のすべての根本にあった筈の本質的に大事なものが消えていった。かつ、もう一つの基礎である自然との接触が無くなった。だから私はカウンセラーになったのです。

カウンセラーとしての活動開始

私が、なぜ浜松大学に行くのを受容したかという、天竜川があるからです。私はその前に、福井の九頭竜川でヤマメの稚魚を7千匹放流しました。すると子どもたちの目が皆いきいきとして、子どもた

ちの自然な会話が戻ってきました。その当初、幼稚園の園長先生が、「私は園長になってから子どもたちには、川は危険だから行かないようにしましよと指導してきました。それを今から川に行くというのは困ります」と反対されました。私はその園長に、「先生のおっしゃる通りです。ですが、私は、川に接触することが大事なので、子どもたちだけを連れていくという無謀はしません」と言いました。必ず親も付いてくる、という条件で子ども30人に親が50人もきて、7千匹の稚魚を放流しました。ヤマメといっても、皆さんは知らないと思います。漢字では当て字ですが、山魚女と書いて、清流の美魚です。実はこのヤマメは、半分は地元に残って、半分は海に出ます。日本海側のは殆ど、オホーツクまで行きます。そしてオホーツクから戻ってきて、元の川で産卵をします。その時には70センチにもなっています。4月の桜の咲く時に戻ってくるのをサクラマス、5月のサツキが咲く頃に戻ってくるのはサツキマスといえます。ヤマメの大きさは、私が放流した時は、わずか2センチ5ミリでした。けれども7年後には、70センチになっています。そういう不思議な魚です。そういう話を子どもたちにしてから放流しました。すると子どもたちは、何にもそういうように教えたわけではないのに「戻ってこいよ」と言いながら放流しました。

このスライドの写真は台風の翌日の釧路川に行って、カヌーをした時の私です。カヌーは無公害です。これは、日本で今一番きれいな川、後志利別（シリベシシベツ）川です。国土交通省が清流度一番にあげている川です。当たり前です。長万部（オシャマンベ）岳から日本海側に流れる川なのですが、この辺りには殆ど人が住んでいません。しかも、山の裏側から日本海に注ぎます。殆ど人間による生活排水が無いので、綺麗なまま、ここ12年トップです。一級河川の中で一番汚い川は大阪の大和川です。でも、堺市や松原市など周辺の努力で、昨今大分清くなってきているのです。

このスライドは私が住んでいる宇治川で、京都教育大や農水省の方々と、子どもたちとで、竹を割り、竹炭を入れて結わえ、魚の寝床を作りました。子どもたちは「なぜ、このようなものを作るのか」と聞かれますが、私は、「魚さんたちには何も説明しなくても、これを置くだけで、ちゃんと分かってくれるからいいのだよ」と言います。

これは、エジプトのナイル川です。世界の4大河川でも最長の川で、全長6240キロです。私と一緒に乗ってる方はヌビア人という、4千年前からここに住んで居る民族の人なのですが、その頃と同じヌビア船に乗せて貰いました。

先ほどの園長さんは、子どもたちの目がきらきらしたのを見て、「先生これからは川に連れて行きます」と仰ったので、「それも嬉しいですが、連れて行く時は、絶対に、たとえば2人の子どもに最低1人の大人が付いていくことを約束してくれないと、山中先生の思想に基づいて行ったら事故に遭ったということになりますから」と言いました。都賀川事件の結論は、上流に1時間に30ミリ以上の雨が降っていたわけです。すると2時間後には、増水することが明らかなのです。今の人にはそういう知識がない。われわれの頃は、このように指に唾をつけて、風がどちらから吹いているか、西の空を見て、雲の厚さがどれくらいかで、大体どれくらい雨が降るか降らないかも分かっていたのですが、今の人たちはそのようなことを全く知らない。今は、今日がどんな気温で、天気がどうなのかすらテレビの天気予報で確認しますが、よく空を見れば自分で分かるものなのです。

皆さん、もう一度川との接触を回復しましょう。そのためには、まず、川が危険でないようにしなければならない。しかし、一方元来、川は大自然の一部ですから、氾濫や洪水や津波など、時にとんでもないことが起こります。自然への畏怖やカシコミ恐れる気持ちが大切なのです。自然というものがどういう性格を持っているのかを詳しく知しましょう。

私のささやかな提案

ここで、提案として、まず、川の本質、川の性格、川の性質、川の欠点、川の美点、川の弱点、川の問題点などをしっかりと理解する必要がある。そして、今日の講演の結論として、クルマ中心社会の進展と環境破壊と合理化、情報革命などにより、人々の関係性の絆が切れてしまった。内的自然、これは、人間の血液は、リンゲル液、つまり生理的食塩水と塩分の濃度は一緒で、いわば海の濃度と一緒になのです。それは元々大自然の濃度なのです。それら「内的自然」と全く関係が切れているということと、海や山や川という「外的自然」とも接触が切れた。それを取り戻すために、まず手始めに、この地表で一番高い山と一番低い海とをつなぐ「川」との接触をもう一度取り戻そう、というのが私のささやかな提案なのです。

どうぞご清聴ありがとうございました。

一色：山中先生、どうもありがとうございました。では、山中先生の非常に哲学的なお話の後、哲学がご専門の香川先生から、子どもの心と自然についてお話していただきます。よろしくお願いします。

香川：哲学ということで、ここで、哲学の講義をするわけにもいきませんので、山中先生が話されたことで、大体おわかりになったのではないかと思います。今言われていますことは、19世紀の産業革命以来、段々と今のような時代に変えていった、そういう大きな環境の変化の中で、大きく変わってきたのは2つあったと思います。それは、一つは、人生の目標や理想像の喪失です。私たちの頃は、生活のパターン、生きていく時にこの人の真似をしたらいいのだとか人生はこういうものだということがわかって動ける時代でした。伝統社会というのは、そういう構図を持っていました。ところが、皆さんの時代は殆どそれがなくなってくる。流れていってしまう。これは、人間関係が希薄になったという背景からも出てくるのですが、そのような大きな環境の変化で、我々の生きる形みたいなのが見えなくなってきたのではないかと思います。それをいろいろな角度から指摘されたのが一点、もう一つ、これは、我々の身体というのは、物質ではなくて、実は生命体なのです。元々、人間の心も身体も縄文時代の人間なのです。ところが、その時代とは違う環境になってくる。それに合わせるには、心と身体にたいへんなストレスが溜まってくる。今はいわば本来の我々の心と身体、生命体としてのあり方が逆転してしまった。本来の姿を見失って逆転してしまったのではないかと思います。それでもう一回、自然との接触を回復するというので、先ほど山中先生のお話で、川で遊んでいると子どもがいきいきしてくるというお話がありました。子どもは生命そのものですから、そのような外の生きた自然にぶつかると、自分の中の自然が蘇ってくるのです。これは、大人も同じです。どちらかという、私は森の方との関わりが大きい

ですが、そういう中に入っていきますと私も野生化します。よく笑われますが、ここにいる時と山にいる時とは全然違う、自分でもわかります。山に入ると、自分の本能に目覚めるような感じになって人間が変わって野生化します。ただ、自分では嬉しいです。自分の身体が生きているという感じがします。そういう意味では、外の自然に接触することによって自分の中の自然が非常に活性化していくという面があります。それを特に、川を挟んだいろいろな実践経験でそういうものを取り戻していきたいというのが、山中先生の基本的な方向ではなかったかと思います。

思想的なことから言いますと、科学が出てきて、どちらかというと、科学をモデルにしたものの見方、考え方、または、それから出てくる技術もありますが、そういう生き方が我々の中心になっているのですが、もう一度、生きた全体というものをどう捉えていくか、これは、生きた自然もそうです。我々がそこに住んでいて、我々が住んでいる世界としての生きた自然、それから人間もそうですが、人間は生物的に見られますし、心理社会的にも見られますが、精神性も持っている、そういういろいろな面もトータルに全部見て1つの全体としての人間をどう捉えていくか。これは、子ども学のテーマになると思いますが、そういう生きた全体性みたいなものをどうして回復していくか。これは今後の21世紀の大きな課題になるのではないかと考えております。私自身も、大学の裏山を開発して、ここで、自然に触れる機会を持って、一つは、従来からある持続可能な社会というような日本の伝統的な里山文化をそこで体験できるようなことをしたいと思うのと、もう一つ、森に入っていくことによって、自分の内的な自然を森との関わりで回復していく、それらを少しでも皆さんに体験してほしいということで、裏山は2ヘクタールの小さな面積、本当の森ではありませんので、それほど活性化はしませんが、それでも、行くことによって、いろいろな体験ができると思います。特にツリーハウスを作りましたので、それらを利用しながら今後も里山活動や森と触れ合う活動をささやかながらやっていきたいと考えております。特に学生の皆さんは、今後職業を通して子どもに関わったり、お母さんになるのでそういう自然との関わりを意識的に持っていただきたいという気持ちで森と少し関係して活動しています。山中先生は、もっとダイナミックで、川で活動されていますが、お話を伺っていると私も参加したいと思いました。以上です。

先生がお話されていたキレる原因の中で、せっかくのポイントなのですが、本当に大切にしたいものがどんどん無くなっているということと、内的な自然との接触とお話されていましたが、少し具体的な例を挙げて、一番大事なところを川との活動でもお話していただければ、今日のポイントになるのではないかと思いますのでよろしく願いいたします。

山中：ありがとうございます。今、本当に適切・的確にまとめてくださいました。今のご質問にお答えすれば、ダイレクトに具体的にこうだということを言うために、次の話を用意していたのです。話をいたしますと、先ほど、冒頭の部分で、冗談のように聞こえたものが実はその答えなのですが、リセット可能な現代の考え方、機械も何もかも切ればすべて完結して切れてしまっ、全部、自分の都合のいい時だけ、コンピュータも携帯も使えばいい。その部分が、自然との関係性にも現れ始めた。見る自然と触れる自然、触れる自然というのが、一つの答えとなるのですが、皆、自然と接触していないわけではないのです。皆さんも六甲山を見ますし、川も見るとでしょう。私が神戸の川を探索し歩いているとイノ

シシが3匹来たのです。かわいそうに食べるものがなくて出てきたのでしょう。先ほど、正に香川先生がおっしゃったように、森は、最初に手をつけなければならない部分で、スライドの説明を省略したおばあさんは、あの時 99 歳、現在 103 歳ですが、あのおばあさんは、福井県で一番最初に女性校長になった方です。あの先生が定年で辞められた後に九頭竜川を守らなければならない。川を守るということは、上流に木を植えることだということで、これまでに 10 万本の木を植えてこられました。これは、正解で、木を植えることは、木が生長するために、根から水を吸います。そのためには、周りの地面に水が保水されていないといけない。そのことをするのが木の役目です。だから、正にその先生がやってこられたことは、九頭竜川を守るための最も大事な行動であった。ところが、これはスパンが違います。木は、30 年、50 年、100 年をかけてやっと生長するものです。50 年後を考えてやっている。ところが今、目の前で、そんな悠長なことをやっていられないと、コミュニケーションを急いでケータイでやっているのが今の子どもたちです。ところが、そう言う形のコミュニケーションを取ることを否定しません。しかし、ぱっと切ると切れてしまうという関係性をどうやって修復していくのかが、とても大事なのです。それは、そう簡単には答えができません。だから、身体との中間項としての自然との接触をまずはもう一度取り戻して、少しは、進化していますが、その実、正に縄文時代の身体のまま、殆ど進化していません。無論少しは進化しています。それは、長管骨が長くなりました。実は、縄文時代も背は高かったのです。日本人は江戸時代が一番背が低いのです。けれども文化や周囲のことが変わり過ぎたので、その部分の調整が難しいと纏めてくださったのは、全くその通りで、我々は縄文時代と全く変わっていない身体を持っています。だから縄文時代に戻ろうと言っているのではなくて、そういう身体をもっと大事にして、自分の身体がどういうことを要求しているのか、どういうことを望んでいるのか。今、女性たちは確かに綺麗になりました。けれども、私から見ると、皆折れそうです。ツイッギーという名前を知っていますか。私たちの時代に、ツイッギーというモデルがアメリカにいて、枯れ枝に少しだけ肉がついていて、その上に真っ白な肌があって、金髪でという容姿でした。彼女が日本にやって来て、一遍に彼女の真似をし始めたのです。なんと、あなたたちを見ていると、半分以上がツイッギーです。これは、健康ではありません。

それからもう一ついうと、子どもは面倒だから生みたくない、作るとしたらずっと後でいい。天皇家に入られた雅子様ご自身が 39 歳でやっとご懐妊になりました。だから、天皇家でさえもそうだからと、なるべく後にと延ばされますが、実は、医学的には、本当は子どもを生む一番の適齢は 18 歳から 27 歳までです。私たちの頃は、クリスマスまでには結婚する。これは、25 歳までには結婚するという意味です。ところが今は、アラサー（アラウンド 30）、アラフォー（40 前後）でという人がいて、これは、生物学的には、よくないです。先ほど香川先生が言われたように、生物学的には、縄文時代とあまり変わっていないので、子どもを産む最適の年齢に子どもを産まないと何が起こってくるかわかりません。実は、いろいろなことが起きます。そのことを言って、脅かしすぎでは困るのですが、結婚式を挙げるか挙げないかはどちらでもいいですが、子どもは先にでも産みなさい。このような現実的なことを女子大で言っているのかと言われそうですが、子どもは先に産んでいいのです。女性は、綺麗なうちに、若いうちに、エネルギーがあるうちに子どもを産んでください。青春や若々しさを謳歌してください。それは大事にし

てください。昔は、それを犠牲にして、子どもを産めといわれました。男の子を産まなかったら嫁に来た意味がないとまで言われたりもしました。雅子さまは未だにそういう亡霊みたいな思想の宮内庁の輩にイジメられているのです。聖徳太子の頃の推古天皇や、持統天皇、奈良の女帝の斉明天皇等、女帝が一杯おられた時代があるのに、いつの間にか明治時代に決めた皇室典範はおかしな取り決めて縛っていますが、歴史的に見てもあれはおかしいです。今も女の子も男の子もどちらも同じく素晴らしいのです。

人間夏目漱石

私は夏目漱石が大好きで、漱石は49歳10ヶ月で亡くなりました。ところが、彼が生まれた時、お父さんが50歳、江戸時代のまさに終わる寸前慶応3年、1867年ですから、その時お父さんが50歳ということは、(以前、堺屋太一さんが、日経に連載していた小説『チンギス・ハーン』で面白い換算式をあげておられました。私もそれに大賛成なのです。それは、当時の年齢に1.2を掛けて、3を足すというものです)今に換算すると63歳となります。お母さんは42歳。今に換算すると54歳、もう母乳も出ません。それで生まれた時に恥じて、養子に出しました。養子に出された家では金づるとして扱われたので、漱石が3歳の時にすでに隣で養父と養母がもったいないのでいいものを食べさせなくていい、但し殺すなという話をしているのを聞いてしまっているのです。漱石は3歳にして、人間には裏側があって、考えていることと表で言っていることに差があるということがわかってしまったのです。それが小説になったのが、『硝子戸の中』や『道草』や『心』です。100年前に書かれた小説で、今読めるものは殆どありません。樋口一葉や国木田独歩らはすばらしい小説家ですが、素文では読めないでしょう。訳文で読んでもわからないかもしれません。しかし、漱石や鷗外は、一つも文章を現代語訳しなくても読める数少ない小説家です。とくに漱石は繊細だったからです。けれども彼はとても苦しんだ人なのです。なぜ、漱石の話をしたかという、現代的で、且つ子どものころは、養母養父に疎まれ、実母、実父にもいじめられた漱石、だから彼はずっと後、心の疾患に悩むのです。漱石は、7人の子どもを持ちました。男2人女5人です。どの子が生まれても、子どもがむずかかって泣いていても、漱石は、「父ちゃんがいるから泣きたかったら泣いたらいい」と言うほど、とても子煩悩で、100年前にすでにイクメンをやっていました。

一色：山中先生、どうもありがとうございます。いろいろなところで、いろいろなお話が出てきて、たいへん面白い講演会ですが、今日のテーマのことで伺いますが、先ほど、香川先生からも、今の時代は、コンピュータがはびこっていて、リセット、便利、簡単、自動という世の中である。それが当たり前の生活の中にある、そういう今の若い人たちが、心の自然を獲得していくためには、どうしたらいいのでしょうか。

山中：そういう意味で、先ほどのお答えをしたつもりでしたが、もっと噛み砕いて言うと、「自然のことをもっと知らなければならぬ」と思います。対象化しすぎて知識としてしか知らない。だから魚たち、

動物たちがどれだけ一所懸命生きているかを体験しなければいけないと思います。今日朝起きて、テレビでウーパールーパーの番組を見ました。動物たちは一所懸命生きています。一所懸命生きすぎて、目的以外の何ものでもないという生き方をしています。例えば、ウスバカゲロウ一つとっても、これは、成虫になると、水一滴も飲みません。大抵は1日か2日で死にます。そのウスバカゲロウの前世が、つまり成虫になる前の幼虫は何か知っていますか。要するに変態する前の姿を知っていますか。答えはアリジゴクです。要するに、ウスバカゲロウのように虫も殺さないような顔をしているのですが、前世は、アリの強敵であるアリジゴクなのです。そういう動物たち一匹だけでも徹底的に調べていくと、すごい虫生（人生ではないので）をしているのです。なぜ、私ができるようなことを知っているのかというと、私は幼稚園に一日も行かなかったからです。皆さん方は幼稚園の先生になれる方がたくさんおられるので、参考にならないかもしれませんが、皆子どもたちに変なことを教えるよりも、花を一つ見て、どれだけ花たちが一所懸命がんばって生きているか、虫がどんなに一所懸命生きているかを一緒に体験してください。保育士、幼稚園教諭になってくれたら嬉しいなと思います。

一色：もう一つだけ、質問させてください。先生のご著書の中に書かれているのですが、自然の中で生まれるファンタジーが人間の心を豊かにする。これもやはりここにいる学生たちは、小さい子どもたちと向き合っているわけですので、自然の中で生まれるファンタジーが人間の心を豊かにするということが、これは、どういうことでしょうか。

山中：実は、「子どもたちはファンタジーの宝庫だ」と私は思っています。ところが、教育、保育も教育の一つですが、「教育が子どもたちのファンタジーの芽を摘んでしまっている」ところにも気がついています。遅刻した子どもがバスに乗り遅れて、歩いてきたら道に蛙がいた、その蛙が背中に子どもを乗せていた。とても可愛かったと言います。でも、そんなこと話す暇はない、遅れてきたのだから、すぐにこちらに来なさいとなる。規則を守らせるということも無論大事なことです。けれども、「その話をこそ、実は聞いてやって欲しい」のです。その中に半分以上、見た事実ではない、その子どものファンタジーが加わっています。その芽をどうやって育むか、大事にするかという、そういう心を持った教師、保育士になって欲しいと思います。

一色：どうもありがとうございました。では、ここからは、質問があれば受け付けたいと思います。挙手をお願いします。

学生A：とても楽しく興味あるお話でした。私たちにも当てはまるタイムリーなお話だったので伺えてよかったです。

学生B：今、子どもを自然に触れさせる機会が少なくなってきているので、子どもにとって自然、川や森などで触れ合うことでいきいきするのだということがよくわかりました。

山中：ありがとうございます。とても嬉しいですが、最後に付け加えたように、だからすぐに川に連れていきます、とはいきません。とんでもない話です。そこで気を付けなければいけないことは、気象状況です。私は登山が好きだったので、そのためには、天気図や25万分の一の地図で、山容や地勢、気圧、雲行き、風向など天候それらすべてのイメージを徹底的に描けるぐらいに学習して、登山していました。ですから、装備や前準備があるので、単に接すればいいということではない、ということも覚えておいてください。

学生C：先生のお話を伺って、この前まで実習で幼稚園の方に行っていたのですが、その中で実習の先生は、子どもは、今自然に触れることが少ないから、例えば蟬取りであったりできるだけ自然と触れ合う機会を設けましょうとおっしゃっていたのを思い出しました。現代は、合理性を求めらる中で、自然と触れ合う折りが大切であると思います。私たちは、現代っ子なので、自然に触れ合って育ってないという現実がある上で、子どもに自然の大切さをどう伝えていくべきかと思いました。

山中：実は、先ほど、親たち自身が生きていないという言い方でお話しました。あなたがおっしゃった通り、あなた方自身が自然との体験が希薄です。その人が自然との体験を教えようというのは無理です。だから、今日から少し一味違う自然との体験、今すぐ山、川に出かけるというのではなく、まず、目の前にある雑草や虫、一つでいいから、例えば花をしっかりと見る。食性というのがあって、ただ蝶を追いかけてただけでは、絶対に見つかりません。でも、その蝶が何を食べているのか、何の花にとまるのかを知っていたら、その花を見つけて待っていれば蝶はくる。だから、今日から、花一つでいい、虫一つでいいので、しっかりと見てください。見たらそれがどういう名前のものであるかをいろいろ探してみてください。そうすると、子どもたちに、この道にショウジョウバッタもいるしエンマコウロギもいるよという話ができます。ところが自分が体験していなかったらそのような話はできません。それを心掛けてください。

学生D：地震の話ですが、阪神淡路大震災は、半分は人災だとおっしゃっていましたが、そのことにびっくりしました。人間と自然は密接に関わっていると改めて感じたので、もっと共に生きていかなければいけないと思いました。

山中：私が先ほどの人災の仮説を立てたのは、理由があつてのことです。私の友人が神戸市中央病院の医長になって赴任したので、そちらに行つたのですが、30年そこに勤めている職員の方が、六甲の山を削つてから天候が変わつた。今まで霧などは全くたつたなかつたのに、毎年霧に悩まされるようになった、と仰っていました。それは、六甲山を削つたため、裏日本の風が通過するようになったので暖かい風とかち合つて、霧がでるようになったのです。そのことから私は、六甲山の土をどれくらい運んだのか、ポートアイランドの土の量を正確に計算したことはありませんけれども、これは間違いなく重心移動があるに違いない、ということで思ひ付いたのです。神戸市のブレインは日本中の市の中でも頭が良すぎて、都合よく合理化し過ぎました。やはり、合理化し過ぎた部分をもう一度、本当の自然を、香川先生

が仰ったような「里山を大事にする」というような思想をもっと前面に出して、やり直す必要があると思います。

一色：では、ここで第一部は終了いたします。先ほど言われた、一つの自然をそれぞれの学生の方は見つけてください。

【休憩】

一色：それでは、第二部を再開いたします。ここからは地域の方からのご質問、コメントを受けてパネリストのお二人からお答えをいただくという形で進めたいと思います。それでは、何か質問、ご意見などございますか。

一般 A：いいお話をありがとうございました。私は、神戸の会下山の南の方に住んでいたのですが、子どもの頃、昆虫採集などをしておりました。そのような自然が神戸はまだ多いとは思いますが、段々とそのようなものが少なくなっていると思います。それともう一つは、子どもの少子化ということで、数が少なくなってくるわけですから、そのために過保護になってくる。するとあまり外に出さないようになりまして。それがどうも大きな問題ではないかと思えます。やはり小さい時に自然にもっと親しまなければいい大人にはなれないと思うのです。命の大切さとかも自然と付き合い合うことによって学ばないと駄目なのではないかと思えます。そういうことを学校でも遠足などでもっと自然に親しむような形をとっていくべきではないかと思っています。

山中：とても建設的なご意見をいただき、とても嬉しいです。私も全く大賛成です。実は、ついこの前、『教育と医学』という雑誌で、これは、慶應義塾大学出版会が出しているのですが、その巻頭言を頼まれて、子どもを危険からいかにして守るか、というテーマでした。危険から守るためには、外に出さない、と考えるのが短絡的な一番間違った考えです。むしろ反対に外に出さなければならない。私は一つの例を挙げて書きました。ある子どもがいて、その子どもは、おばあちゃん子で子どもが何かしたら危ないということで必ず手を繋いで幼稚園に連れて行っていた。ところがそのおばあちゃんが風邪をひいて、そういう時は大抵お母さんがいつもは連れて行くのが、お母さんも仕事があり、他の人も都合がつかず、結局この子どもは、一人で行かなければならなくなった。そして、この子どもは交通事故に遭って亡くなってしまいました。これは、典型的な例ではありますが、おっしゃる通り、危険というものがどういうものなのかという事すら考えていない。だから、自分で思考が働かない。少し、向こう側から何かが来て、もっと見たいと思って前に出たらクルマに引かれたのです。それからもう一つ、NHK ブックスの本の中で『友達 100 人できるかな』という本があるのですが、これは、ある学校の先生が書かれたのですが、先生をやっていて、実は先生として自分が子どもに教えることよりも、子どもたちが教えてくれることの方が多かった。その内の一つを挙げると、クラスの中に目が見えない全盲の子どもが入ってきた。先生

は、まだ赴任して3、4年目で、経験したこともないし、どうやって教えていいかわからないし、危険だからということで、遠足に行く時でも、校外実習する時も、右にA子ちゃん、左にB子ちゃんと手を繋がせて歩いたわけです。するとB子ちゃんが「右手も左手も手を繋いで歩いたら、この子は何をやっているかさっぱりわからない。左の手を空けてあげて」と言いました。「そうすれば、左手で、生垣があるな、金木犀の匂いがするなと手で触ったり、五感を働かせながら葉を触ったりしながら歩ける。そうしないと何もわからないよ」と言ったのです。それでその子は片手を働かせて、体験ができるようになったことがその先生の本に書いてある。子どもたちの方が賢い。私たちが教育学で教えてもらったことを教えるよりも遥かに子どもたちの方が実践的でいい。それは今おっしゃった自然の体験があるからなのです。

一般B：楽しく聞かせていただきました。ありがとうございます。自分の中にも自然を感じるということがあるのだということと、子どもを3人育てたのですが、その時に、自然に触らせたいという思いもあり、川で遊ばせた記憶を思い出しました。下の子どもが男の子で高校生なのですが、学校を辞めたいと言っていて、生きている意味を感じたようです。それも含めて、自然を感じて育ってきた子どもなので、何とかなるかと思っているところです。もしよければ、先ほどの高校生の患者さんの話を伺いたいです。

山中：高校生でいらっしゃるんですね。高校生以上になると、実は独立した存在として両親の言うことをなかなか聞けないので、例えば男の子であれば、いつもお母さんの言うことを聞いているようだったらむしろおかしいです。お母さんより彼女のほうがいいはずです。もう、高校生では少し遅いのですが、実は、本人ではなくて、あなたが楽しむことが大事なのです。まだ手遅れではないのです。だから、先ほど言いましたが、親がいきいきしていない、親が自然と親しんでいない、その方からやっていけば、なぜ、お母さんはこの頃出かけるのだとなる。そのケースでいうと、ある事例を思い出のですが、私は、放送大学の客員教授もしているのですが、そこで、このような話をしたら、お母さんが放送大学に入って来られて、卒業論文を書くのですが、なんと、川に行っているいろいろなことをしようと思ったということで、その方は宇治の方ですので、毎日、宇治川に行っていた。そこには鮎釣りをしている人がいるのですが、実はこの鮎は、鵜飼用に鮎を放流していて、鮎が鵜飼用の閉じられた空間から飛び出て、普通の宇治川に来ているのがいて、それが釣れるのです。それが目的で釣りに来ている人がいるのですが、とにかくその釣りを、毎日しているところを回っていたそのお母さんに、釣りをしているおじさんが「釣りをしたいのなら」と竿を一本くれたそうです。その竿を持って釣りに行くようになった。でもどうしても釣れない。同じ時間にいてもそのおじさんは、5匹も10匹も釣るのに、そのお母さんは釣れない。なぜ、釣れない釣竿をくれたのと聞くと、では竿を交換しようということになって、交換しても釣れない。何が違うと思いますか。待ち方、合わせ方が下手なのです。当たりが来た時にぱっと合わせるといった技術的な問題が一つ、餌のつけ方が下手なのです。いろいろなことがあるのです。そういうことにだんだん慣れてきてやれるようになって、そのお母さんも釣れるようになったのです。毎日釣竿を持って出かけるようになったので、小学生の娘さんが、お母さんは毎日どこに行っているのだろうと探したそ

うです。というふうに、まずは、自分からです。結論は。都賀川の場合は、つい先ほど雨が降ったという事は天気予報でも出ていたわけです。増水は雨が降って2時間後にくる。しかも増水した際、その時2メートル水位が上がったのです。それで7人が流されたのです。だから、周囲に雨が降っていないかどうか。特に上流に降っていないかどうかを確かめて、というそういう基礎知識を踏まえたら、自分から楽しんで欲しいのです。あなたが好きなことをされたらいいと思います。お花が好きだったら、川の畔にどんな花が咲いているか、それらを皆さんは雑草といっていますが、雑草という花はないのです。実は、全部名前が付いている。そしてとても可愛いのです。その可愛い花を見て摘んできてもいいですし、しかし、高山植物は摘んではいけません。でも雑草は構いません。雑草といわれているのは、理由があって、どうやってもきちんと育つからです。だから、摘んできて、調べるのもいいし、いろいろな遊び方がありますので、あなた自身が遊んでください。

一般C:実は、今日、こちらに来させていただいたのは、2つ理由がありまして、1つは現実的なことで、この大学の香川先生の方からご紹介がありましたように、裏山は里山の状態にあるわけです。そこで、今、里山の再生活動、これは、NPOなのですが、実は、国営あいな里山公園で、10年来、市民活動をしてきました。香川先生とも、その場で会いまして、ずっとご指導していただいております。その時は、どこのおじさんかと触れ合ったのですが、後で伺って、哲学の先生だと聞いて、驚いたこともありますが、現在、その裏山で活動させていただいております。

2つ目は、このテーマ、「子どもの心と自然」特に子どもの心ということで、常々いろいろと考えているのですが、なかなか答えが出ないという状況でいるわけですが、いろいろなお話を聞いてみると、子どもの外の面、キレるとか、危険だとか、自然との触れ合いが足りないなど、そういう話が多いわけですが、肝心の子どもそのものが、どういう存在であるかということについて、私自身も答えが出てきません。やはり、人間なのですが、これは、ヒトという生物であるという面からもっと、子どもも見直さなければいけないのではないかと思います。いろいろと子どもの自然の中での活動を考えている中で、一つのテーマとして、子ども、人間の内なる自然とは何なのかということも勉強しています。

そういう点で、今日のお話を聞いて、たくさんヒントをいただきました。外にある自然に対して、内なる自然とは何なのかということが、非常に知りたいことなのです。今日も、先生のお話の中で、宇宙のことが出てきました。マイクロコスモスというのは一体人間の中でどういう形であるのだろうかというような難しいテーマで恐縮ですが、お話を伺いたいです。

山中:半分は、恐らく、香川先生の領域なので、香川先生から補足していただいております。今のご質問に対して、私なりのお答えをしますと、実は、マイクロコスモスという言葉を使ったのは、単なる体裁で使ったのではなくて、今とても正確な物言いをされたので、答えると、マクロコスモスのことは、皆、大分わかってきました。例えば、140億光年向こうの星までハッブル望遠鏡で見えるようになってきて、宇宙全体が140億年ぐらいの歴史があるなど、いろいろな星雲や宇宙があるし、実際の現実から見てもいろいろなものがあるということで、外的な自然のことは、知識としては、いろ

いろ持ってきたのですが、内なる自然については、そういう定義の下に、そういう考え方で眺めようという人が非常に少ないので、よくわからないとおっしゃるのが普通です。

実は私が何を考えているか。まず一つは、先ほど身体ということを出しましたが、身体的な部分、要するに人間の身体がどういう構造をもって、どういう形で作られているのか。この前ノーベル賞受賞の噂では山中伸弥教授かとも言われていましたが貰えなくて、別の人が貰いましたが、あの方々が研究しているのは、万能細胞です。万能細胞というのは、一言でいうと、本来は、神経になったり脳になったり、いや元来、神経と脳は一緒なのですが、心臓になったり、皮膚になったり、目になったりしている細胞が痛んだ時に、それを修復させるのに、自分の細胞だったら拒否反応が起こらないので、自分の細胞でそれをどのように再生させるのかという研究をしているわけです。それで細胞学というもの、殆ど究極的なところまで行きつつある。しかも DNA の配列から見ると、30 メガ、30 億の塩基対が並んでいる。ところが 30 億全部はなかなか大変なので、その中のミトコンドリアの 1 万 6 千塩基対の配列の順番が全部分かり、その後人間の細胞の全配列もすべて分かったのですが、実は、皆分かったと言ってるのですが、それはただ順番が分かっただけなのです。要するに、アデニン、シトシン、チミン、ロイシンという 4 つのアミノ酸の配列の順番が分かっただけであって、それが各々どう連関してどういう機能でどういう働きをしているのかというのは、まだ何も分かっていません。まだそういうレベルなのに、科学をただ見ているだけの人は、表面だけをなぞって、分かった。もう人類は全部解明されたと思込んでいるのです。ところが、実は、今日ウーパールーパーの話がでましたが、ウーパールーパーの細胞というのは、どこを切っても全部元に戻るのです。なぜか。ところがならないものが出てきた。なぜ戻らないのかと調べてみると、実は、細胞そのものの増殖能力はあるのですが、どの位置にあるのかという情報がわからないと増殖しないのです。ですから、頭が 2 つできてしまったり、足だけの動物になったりしてしまいます。ところが、それが皮膚の位置にあったとか、肝臓の位置にあったという情報を一つだけ、その情報を持った細胞をいれてやると、全部元どおりになるのです。何が言いたいのか。実は、そのこともウーパールーパーでやっと分かったぐらいで、殆ど分かっていません。だから、殆ど解明されたといわれている身体の神秘は、細胞のレベルでいうと、殆ど何も分かっていないのが、事実なのです。そういう謙虚な気持ちで、考えていかなければ、身体のこと何も分からないというのが一つですが、今のご質問はとてもよくて、そのような身体性の問題だけを聞かれたわけではありません。

マイクロコスモスというのは、そもそも何かというご質問ですが、私なりに答えますと、実は、子どもというものをもう一つの関数として置きますと、子どもは、私のイメージでは、「可能性の宝庫」です。要するに細胞にしろ、能力にしろ、何になるか分からない、どうなるか分からない。ところが、現在は、教育という名の下に勝手な矯正が行われているので、可能性の大事な部分が殆ど摘まれてしまっている。その可能性の大事な部分を摘まなくて、可能性を最大限に生かすためにはどのような方法論があるかという意味で、まず第一に、自然と接して、自然の中に置いた時に、先ほど、香川先生とも話をしていた、先生も山に入ると別人だと言われるぐらい元気になって自然性が戻ってくるとおっしゃっていましたが、そういうのは身体が覚えているのです。木の下に行くと、草の上に行くと、葉の匂いを嗅ぐと、実は、そういう血がうづきだして、昔、縄文時代の人間がどうしていたのかというのが、戻ってきて、

そこで日常の変なことで切られていたものが繋がっていくという体験をされているのだと思います。子どもたちにそういうことを本当の意味で体験させていくと、実は、内界がもっている可能性の芽を摘まずに済むどころか、それが育っていくのです。どういうふうに育っていくのかは、子どもによって違います。

3つ目に想像力、クリエイティビティ、或いはファンタジーという言葉を使います。ファンタジーと想像力が一緒だと思っている方もいるのですが、実は、少し違うのです。例えば、一卵性の双生児で、全く生物学的な組成は一緒でも、育ちによって全然違う子どもになっていきます。それは、子どもなりに外界との関数でいろいろ育っていくわけです。その時に自分なりのファンタジーを持っているのです。そのファンタジーを教育で矯正されてしまって、可能性が伸びなくなっているのです。そのファンタジーを最大限に伸ばしていく方法論が必要なのです。そういうことを項目別で挙げていくと、何百と出てくるのですが、それら全部、身体の中に、心の中に詰まっているのです。それを私は、マイクロコスモスだと言っているのです。マクロコスモスの星雲の数は今、170億と言われてます。一つの星雲の中に10の11乗個の星がありますので、計算するだけで、恐らく10の20乗から30乗の星が宇宙にあると言われてますが、それと同じだけの可能性とファンタジーの心、創造性の心がありますので、私は、マイクロコスモスという言葉、殆どマクロコスモスと同じだけの可能性を持っている存在が子どもであるという定義なのです。どこの部分からでもいいので、あなたがお好みのある部分から、そういう視点で子どもと接していかれると、子どもの持っている可能性は伸びていきますので、その点で一緒になったら、その時は、恐らくその子どもと同じ年齢になっていると思います。それが第一の答えです。

もう一つ、里山のことで言うと、実は、滋賀県知事の嘉田さんが、まだ京都大学にいらっしゃった時に、里山の研究を学者としてされていて、それで琵琶湖博物館でシンポジウムが持たれて、私も呼ばれて、いろいろ発表したのですが、里山の問題点はたくさんあります。里山が無くなってしまったので、イノシシも困っている。昔は、不文律があって、里山までは、イノシシまでも出てきていたし、私が住んでいる宇治市でも、タヌキもキジもウサギもいましたが、殆ど払拭されてしまった。里山からはちゃんと家に帰って行っていたのですが、里山が無くなってしまったので、出てきてみたら、もう町だったということで、可哀想に彼らは殺されたりしています。特に一番困っているのは、熊です。イノシシも特にウリボウぐらいだったら、悪さをしても大したことはありませんが、大人のイノシシになると、牙も持っていますし、熊に至っては、別に熊の方は、特に悪いことをやったつもりはありませんが、ぶつかったら相手が死んでいたということになります。これは里山が無くなったからなのです。ですから、里山を再生しようという動きができたのですが、ここで考えなければいけないのは、里山を作る時にただ木を植えればいいというわけでは駄目で、京都はまだ自然があつていいですねと言われますが、京都は本当は自然が少ないです。例えば北山杉がありますが、その北山杉を植林したために、絶滅した昆虫や植物が多くあります。ただ一種類の木を植えるのは、自然再生には繋がらないのです。本当の意味で言えば、いろいろな種類の植物が育って、自然淘汰されていくのを待つのですが、どんな植物でも育つというのがいいのですが、そうなると汚くて人間は入れません。それでは里山の意味をなさないので、その辺りをどこで限界性のピリオドを打つかということとの関数かと思います。なるべく複数の種類の植物を植えて、複数の昆虫たちが住めるような環境をどう町と山との間に完成させていくのかというテーマ

が恐らく現在の里山の保全の大事な部分であろうと思っています。ここからは、香川先生に伺いたいと思います。

香川：どう答えていいかわかりません。具体的な話より前に、マイクロコスモス、マクロコスモスというのは、ずいぶん前、ギリシャの昔から言われていますので、恐らく私の勘ですが、あの時代は、コスモス、自然というのが一定の秩序を持ってある。その中で神様とか死すべきものとして人間が住んでいて生きているという発想があります。恐らく、人間が生きているというのは、この大きなコスモス、自然の秩序に従って生きるのが、確かな生き方なのだという考え方があったのではないかという気がします。大体、カタコスモスというのは、秩序に従ってという言葉としてあります。これは、考えると、ギリシャだけではなくて、仏教でも、世界は生命エネルギーからずっと上まで続いている通しのもので秩序を持っている。我々生命体としては、外側の自然の動き、簡単に言うと、外側が歪んでくると内側も歪むと考えています。ですから一番土台、生命体でいうと、遺伝子のレベルからもそうですが、そういう土台のあり方が狂ってくると、やはり自然との関わりが狂ってくるだろうと思っています。その一番の土台の生命エネルギーから形を成して、心理社会的なレベル、精神的なレベルもありますが、生命レベルが一番の基盤になりながら、その上に心理、社会的なレベルがあって、精神的な構造がある。これは俗にこの三層構造であると言われています。現在は逆転してしまって、一番元の基盤が忘れられている。この基盤の部分は、いろんな可能性を持っているけれども、逆から言うと、いろいろなシステム、その他で全部抑えられて、ある決まった形で発生していると言われるような規制の中で可能性が育てられるという、正に逆転された発想があるのではないかという気がしています。だから、もう一度生きた全体というものから、位置づけていく。

自然も同じです。エネルギー源としてどんどん取奪するのではなくて、生態系全体と見た時にどういった形が最適なのか、里山というのは、正に、放ったらかしでもなく、人工的でもない。手を加えながら、お互いに共存しながら持続可能な社会を作っていきましょう、ということで自然と対話をしながら人間が出した知恵です。恐らく生き方とか我々の生命を考える場合に、最高のもの、最善のものというより、最適、我々が生きていくために、これがいいポジションだ、我々がうまく落ち着いてしっかり生きれるとか、気分が安定していいなど、そのような最適というのをもう一度考えたらどうかと思っています。このようなレベルでやっていかなければいけないということと、それから脳から言ってもそうですが、我々は生物ですから、自分が可愛いですし、殺して欲しくない。逆に言えば、殺して欲しくなければお互いに命を大事にしなければいけないということなのですが、脳でも他人に親切にすることが嬉しいというのは、入っています。どうもサルを見てみても、自分の群の仲間内、家族でうまくコミュニケーションをしている。人間も主要集団では、エゴを抑えながらうまくしていますが、チンパンジーでしたか、集団で他の群を無意味にやっつけたり、殺したりということを突然するようです。集団の凶暴性というのは、人類が教育、文化を考えだした元になった一つの原因ではないかと私は思っています。教育するとか、精神性を育てるということをきちんと考えないと、どうしてもそれを発動しますとお互いに潰してしまいますので、共存して平和に生きようとしたら、そういう面を育てなければいけない。この部分が人類は

今だに育てきれない部分だと思っています。私自身の課題として、その部分、生命まで入れて、どうやって育て直すか、またそのシステムはどのようにつくればよいのかというのが私の長年のはっきりさせた夢ですが、今だにわかりません。

それと恐らく、山中先生が言われた、子ども、マイクロコスモスの子どもというのは、そういう問題と非常に繋がっていて、非常に難しい問題だと思っています。ただ、もう一方で山中先生が川に連れて行って一緒に遊ばばいいと思います。それでいいのです。そんなに難しく考えることはありません。頭で考えるとかえって間違えます。むしろ自然に任せてそこで、失敗する、生きているものを触って驚く、それが全部学習になります。子どものいろいろな感性を解放しますし、やがて大学に入ってくると、これが研究テーマになる。だから一番原点で、そのような多様な経験をして、自分なりに、経験したものを土台にして生きていく。多様な経験をさせるという最も生命体として感じれる経験をどうさせるかが、私が一番考えていることですし、山中先生の試みにも賛同するところです。やはりこれを作ってあげないといけないと思っています。だから子どもは生命体ですから、逆から言えば、親があまり手をかけないでも、結構きちんと育てていくという、大きなシステムの中でほほほ守っていくシステムができればいいのではないかという気はしています。だから、あまり、これが最善と決めすぎて、全部形にはめてやっていくと、全部生命というものを駄目にしてしまう要素があるので、もう一度 21 世紀は逆にどうやって最適値に入れていくか。これは教育の現場でも文化でもいろいろなものの中で再検討している時代に入ったと思っています。

一般 C： どうもありがとうございました。香川先生から要するに身体でと、正に香川先生でないとしてこない言葉ではないかと思えます。山中先生もありがとうございました。先生の今日のお話ぶり、それ自身により一つの方法論を授かりました。サイエンスというのは、数値だけではない。それに変わるべきものは何か。自然ですね。ナチュラルストーリー、そういう話の中で、私自身いろいろヒントを得ることが出来ました。

一色： 皆さん、どうもありがとうございました。ちょうど時間になりましたので、この辺りで終了したいと思います。今日は、最後に非常に深い話が出て参りましたので、私からのコメントはなしにして、自然と人間の良い関係をもう一度きちんと築き直していくということで、川、里山、森の多様性、その中で人間も生きているということが大切であると思えました。本日はどうもありがとうございました。